

大海賊の生き様

ピンクマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かの伝説の大海賊エドワード・ニューゲート

彼を知らぬ海賊はいないとまで言われ、長い間海賊の頂点に君臨していた。しかし彼の過去について知るものおらず、彼の出生は謎のままであつた。しかし新世界のとある町のとある情報屋がある情報を明かすことを決意した。

これは大海賊白ひげの出生と成長の話である。

※これはあくまでオリジナルのストーリーであり、原作の設定を正確に反映できておりません。ですので原作との食い違いが起こることがあります。そのところはご了承ください。

また、一部残酷な描写があるかもしれないのにご注意ください。

始まり

第0話プロローグ

第1話戦場での出会い

第2話戦場に降り立つ

目

次

始まり

第0話。プロローグ

世は大海賊時代、幾多の海賊達が海賊王ゴード・ロジャーの遺した財宝”ワンピース”を目指し海へと旅立つた。

そんな時代の最中、とある海賊の処刑が発表された。

「号外～～!!号外～～～～!!!!”ポートガス？エース、の処刑が発表されたぞ～～!!」

その情報は世界へと瞬く間に広がり、人々を恐怖と絶望に陥れた。

「ああ～～神よ!!世界はどうなるのでしょうか!!」

「かいぞくーしろひげおによりこわいー!!」

後にこの男の処刑を巡り、四皇に数えられる白ひげ海賊団と正義を司る海軍本部との全面戦争、またの名を頂上戦争が起ることになる。この戦争によつて発生した被害は甚大であり双方共に被害は酷く、特に白ひげ海賊団はポートガスDエースと船長であるエドワード・ニューゲートを失う結果となつた。

?

新世界のある酒場にて・・・・・・

「ほおくくく、白ひげは死んだかア・・・・」

「そぞらしいぜえ!! いくらあの怪物でもさすがに海軍本部の全戦力には勝てなかつたようだ!!」

「まあ、若い頃ならまだしもあいつも歳だからな、当然だ」

古びた酒場ではただの酔っ払いや海賊、ゴロツキなど多くの人間が入り組んでおり、彼らはつい最近起こつた頂上戦争の話でもちきりであつた。

「そういうえばちよつとした噂なんだが、今話題の白ひげつて実はこの町で生まれたつて噂なんだぜえ!!」

「ふーーーーーーー誰だよそんな噂流したやつ。」「はあ? んなアことあるわけねえだろ!!」

一人の若輩の若者が言つた言葉に酒場中の者たちが笑い、嘲笑した。だがその中で、一人の老人が口を開いた。

「ほおくく、そこのおめえさん、随分と面白い話をしてるじゃねえかわしにも聞かせてくれねえか。」

「チイツ!、めんどくせえ奴が来たな。」

「シイーー! 静かに!!、あの爺に聞こえたらどうするんだ!!」

その男がしゃべりだと同時に途端に酒場はしんみりとし、まるで葬式ムードのようになつてしまつた。それは彼があまりに迫力があり、彼の体から何とも言えないオーラを酒場の皆が感じ取つたから

である。だが、その男は見た目からしてもかなり歳を食つており、本来であればヨボヨボになつていてもおかしくないのにその年齢からは想像できないほどまでに歴戦の風格があり町でも彼を知らぬものはない、だが、その異様さから周りの者に敬遠されている。

「あの……」

そんな中、先ほど酒場で皆に笑われ、嘲笑されていた若者がオドオドしながら口を開いた。

「ん？どうした、さつきの話もつと聞かせてくんないか。」

「いえ……その……」

「どうかしたのかねえ？若者よ」

「いや……」の話は風のうわさ程度に聞いたもので……確証もないから……聞いても意味ないというか……なんというか……。」

「ほおーー、そうかい……わしはその噂、本當だと思つてるがねえ。」

「「「…………」」

「「「ええええええええええ!!!!!!」」

静寂になつていた酒場が途端に絶叫に包まれた。

「おいおい爺さん、笑えねえ冗談はやめてくれ……」

「さすがのあんたでもこんな確証のない話は信じねえだろ……」

「そうだぜ……、こんな荒唐無稽な話が本当なわけねえよ」

酒場の皆が一斉に絶叫した理由、それはこの爺さんが町で有名な要因と結びついている。

そう、この爺さんは町でも有名な情報屋なのだ。情報屋は名前の通り情報を使い売り買っている人間で、そのため商品ともいえる情報には新鮮さと確証性が必須となってくる、つまり情報屋として確証性のない情報を信じ提供することは情報屋としての沽券にかかる。だからこの若者の信憑性の低い情報を信じたこの老人に皆、驚いたのである。

「いやいや、皆よ、これは本当なのじやよ……」

「わしはこの町に生まれ、この町で育つてきた……だからこの町のことわしの知らないことはない」

酒場にいるもの達は未だ啞然としてしているものの、この情報屋の話を静かに聞いていた。

「これはわしの情報屋人生の中でもつとも貴重な情報じやつた」

「だが……もうあやつも死んでしもうた……わしも歳老いて……もうそんな長生きもせえへん……ここで潮時なのかもしけんな」

情報屋の爺さんはまるで何かを決意したかのように、口を開け、酒場にいる者たちに語り始めた。

「皆の者よ・・・、この話、信じるも信じねえも良し、わしの情報屋としての最後の仕事をしたい・・・聞いてくれねえか・・・」

ざわめきが一瞬氷の世界に閉ざされたように凍りつき、皆が情報屋の話に耳を傾けた。

「あの男、白ひげがこの町で生まれたことは真実じや、あやつと出会ったのは、まだわしがまだ情報屋をしていなかつた頃のことだ・・・

第1話 戦場での出会い

時は53年前に遡る・・・・・・

「ボスウツ！新門地区のギャングどもが攻めてきやしたぜえ」「お、そうか、向かい撃てええ!!」

この町では紛争が日常茶飯事となつており、この町で生きていく上で弱い人間は淘汰され強い人間はその名をこの町に轟かすことができる。まさに弱肉強食の世界である。

そして、そんな中、紛争地帯にある古びた廃墟のビルがポツンとそこに存在していた。

中にはまだ成年にも満たない若者が数人いて、何かを話し合つているようだ。

「あの・・・大将？」

「ん？どうした」

「いえ・・・その・・・俺たちも戦いに行つたほうがいいんじやないですかね？」

「なぜだ？」

「いや・・・なぜつて・・・」

外では自分らとギヤングたちの紛争が起つており、自分たちも名をあげるため、または相手の大将の首を探るために戦いに出る必要があるのに、静かにビルの中で立て籠つていて、彼を大将と呼ぶ者たちは焦り、不安を感じている様子だった。

しかしそんな彼らとは裏腹に大将と呼ばれた男は、落ち着いた様子を見せながら部下たちに話しかけた。

「落ち着けよお前ら、事は至つて順調だ」

「順調つて・・・何が順調なんですか大将！」

「そおつすよ!!こんなビルの中に立て籠つてないでとつとと戦いに行きましようよ!!このままじゃあこの戦争に負けちまいますぜえ!!」

彼らの言葉を聞くや否や大将と呼ばれている男は彼らの単純な考え方におきれたかのような表情で返答を返した。

「いいか・・・おめえら、戦争つてのはただ真正面から戦えばいいってもんじゃねえんだ、相手の意表をどこまでつけるかで戦争の勝敗は変わってくるつてもんだ」

「そ・・・そおなんすか？」

「ああ、そういうもんだ・・・」

大将と呼ばれている男はしやべり終えると再び口を閉じ、まるでタイミングを計っているかのように鋭い目で窓ガラスの向こうの戦場を見渡していた。
(戦場には必ず道が存在する、例えどんなに混戦していても、あきらめず見続けていれば、きっと・・・勝利へと続く希望の道が・・・だからそれまで俺は待ち続けるぜ)

戦場に異変が起こったのは彼が部下を諭してからそう時間は経つてない時であつた。

突如、戦場に男が現れた、その男の髪は金色で、大きい背に太い腕、厚い胸板、他の者たちとは比べ物にならないほど迫力とオーラを持ち合わせていた。

それはこの男の登場によつて、戦場を一瞬にして静寂へと変えてしまうほどであつた。

「お、おい、あいつ誰だよ・・・」「あ、あんな奴見たことねえぞ・・・」

そして、戦場に舞い降り、一瞬にして静寂へと変えた男は大胆不敵に笑みを浮かべ、戦場にいる兵士達に響き渡るような大声で、こう言い放つた。

「この場にいるクソ野郎どもオ

・・・・・・・・俺の家族になれ

!!!!

「「「・・・・・」」」

!!!!!!「「「」」」

第2話 戦場に降り立つ

突如として戦場に舞い降りた大男の一言は皆を啞然とさせ、一時的ではあるが戦闘は停止していた。

「いきなり、出てきてこいつは何を言つてんだ!!」

「正気の沙汰じやねえぞ」

兵士の数名がいまだ残る驚きと新たに芽生えつつある困惑を表した表情の中、大男は不敵にニヤリとしたまま、戦場を見渡し、話を始めた。

「てめえら、そろいもそろつて俺の故郷を荒らしやがって、このはなつたれどもが・・・」

「知るか!! てめえには関係ないだろ!!」

「だが、バカな息子をそれでも許そう・・・」

「こいつ、ほんとになんなんだよ・・・」

戦場の空気が先ほどまでの殺伐とした空気から、この大男の登場で、今や混沌と化していた。そんな中、戦場にいる兵士の中でも一際体格がある男が大男に近づいていった。

「おめえさんが、どこのどいかは知らねえがな、いきなり現れて意味わかんねえこと抜かしやがつて、この戦場を荒らしてくれたことのケジメはしつかりつけさせてもらうぜ」

男は大男に向けて、足を運び、手に持つていたハンマーを握りしめた。

周りの兵士たちも目標を大男に変え、歩き始めた。

「おめえら、家族に刃物向けるつていうのか・・・」

「うるせえな!! さつきから家族だ息子だのいい加減にしろや!!」

周りの兵士たちが雄たけびと共に、一斉に大男に飛び掛かり、攻撃を始めた。

しかし、攻撃を加えた兵士たちはある異変に気付きました。

「うそだろ・・・、刃物が体に刺さらねえ・・・」

「どんな体してんだよ・・・、こいつ・・・」

「か・・・怪物だ!」

大男は無傷であり、先ほどと変わらない姿でその場にたたずんでいた。周りの兵士たちはその姿に怯え、多くの者は戦意を喪失していた。

「やべえな・・・収集がつかなくなってしまった・・・」

大男もこの混沌とした状況にひとり、頭を悩ませていたが。

そんな時、突如、後ろから気配を感じ、振り返ると一人の男が立っていた。

「よお、あんた、後ろから見させてもらつたが、随分とおもしれえ冗談言うじやねえか」

「冗談じやねえよ、俺は本氣でいってんだぜ」

「まじかよ、あんたほんとにおもしれえ人だな」

「あんたの名前教えてくんねえか?」

「俺はエドワード・ニューゲート、夢は海賊として海に出て家族と生活することだ」

「海賊になつて、家族と生活するつて、あんたほんとに滅茶苦茶だな」

今この時、偶然にも起こつた謎の男の出会いが、後の大海賊白ひげの運命を大きく変えることとなつていくのはまだ誰も知る由はなかつた。